

# 環境心理生理分野の研究状況の現状認識と研究課題の将来展望

大井尚行<sup>1)</sup>, 小島隆矢<sup>2)</sup>, 山中俊夫<sup>3)</sup>, 宇治川正人<sup>4)</sup>  
Naoyuki Oi, Takaya Kojima, Toshio Yamanaka, Masato Ujigawa

- 1)九州大学 大学院芸術工学研究院, 准教授, 工学博士 (oi@design.kyushu-u.ac.jp)
- 2)早稲田大学 人間科学学術院, 准教授, 博士(工学) (takaya@waseda.jp)
- 3)大阪大学 大学院工学研究科, 准教授, 博士(工学) (yamanaka@arch.eng.osaka-u.ac.jp)
- 4)竹中工務店 エンジニアリング本部, 部長, 工学博士 (ujigawa.masato@takenaka.co.jp)

日本語要約 本稿は、2007年7月現在における環境心理生理分野の研究状況の現状認識と研究課題の将来展望を環境心理生理運営委員会主査が中心となってまとめたものである。最初に分野の位置づけに関する認識と、日本建築学会における歴史的な経緯を記した。現状については、2007年度の大会発表における細々分類とセッション名から状況を概観した後、現在の環境心理生理運営委員会の構成および活動を、傘下の小委員会については各小委員会の現主査が、それぞれの経緯・現状・将来目標と課題についてまとめた。将来展望としては、研究分野の次世代を担う若手の育成に向けた取り組みと現在考えられる研究活動の可能性に触れ、全体のまとめとする。

環境心理生理, 環境工学, 環境心理, 感覚・知覚心理, ヒューマナイズジング

## 1. 環境心理生理分野の位置

建築環境工学における研究は、建築学の中に位置づけられる一方、それぞれの関連分野は建築学の枠を超えて広がっていると考えられる。環境心理生理分野でも事情は同様であり、心理学、生理学はもとより、社会学なども関連のある研究が行われている。

建築環境工学の中で直接の対象でなかった人間を扱うことについての意義については、分野の確立過程で中心的な役割を果たされてきた乾正雄先生が、学会賞受賞時に寄稿された文章<sup>1)</sup>に非常に明快に解説されているので引用しておきたい。

大学を卒業した頃は、私も建築の研究は実用になるものでなくてはならないと考えていた。しかし、今の私はそれだけが研究とは思っていない。実用からだけアプローチするには建築はおもしろすぎるのである。われわれは専門の対象として建築を取り扱う。しかし、それは人間というポジが抜けたあとのネガなのであって、建築をつつこめばつつこむほど陰画だけを問題とすることにあきたらなくなり、興味は人間の方に向いてこざるを得ない。

(中略)

また、およそ学問というものは、どこかで人間にかかわっているのだから、この立場から発する研究は思いもよらなかった別の分野につながるインターディシプリナリーな道をたどり、現代的要請にも合致することになる。

(中略)

しかし、それ(筆者注: 決定論的な設計資料データ)だけでは物は出来上らないのである。建築が建築になるためには、非決定論的な心理的データが不可欠であり、それは、ちょう

どあんなに沢山つくられる住宅が一軒一軒ちがっていかなくてはならないように、多様でなくてはならないのだ。

建築環境工学本委員会傘下の各運営委員会(企画刊行運営委員会を除く)の名称は、環境工学分野内で一般に認知された研究分野と考えてよいであろう。これらを大別すれば、音環境、環境振動、光環境、熱環境、空気環境、水環境、電磁環境が環境要素別の研究分野であるのに対し、建築設備、都市環境・都市設備、環境心理生理、環境設計の4つは環境要素別ではない横断的な、他の切り口からの研究分野ということになる。すなわち、環境要素別の研究分野を主要な縦糸とすれば、これらは横断的な研究を意図する横糸として位置づけられると考えられる。

建築環境工学分野以外とのつながりについて考えると、環境要素別の研究分野および建築設備分野は、それぞれ対応する建築以外の他学会(音響学会、照明学会等)とのつながりが深い一方、建築学会内では他分野とは区分されているように見える。それに対し都市環境・都市設備、環境心理生理、環境設計の3分野は他学会(設備系、心理系の学会等)とつながるだけでなく(少なくとも設置意図上は)都市計画分野や建築計画分野等々ともつながっているはずである。

したがって環境心理生理分野では本来の、人間と環境の関係を心理生理的に総合的にとらえる研究ならびに関連する手法に関する研究を深化させると同時に、環境工学分野の種々の研究分野、環境工学以外の他分野を横につなぐ役割も担っていると以前より考えられてきており<sup>2)</sup>、これは現在でもなんら変わっていない。

## 2. 日本建築学会における環境心理生理分野小史

この機会に、資料を基に環境心理生理分野のおおまかな歴史を振り返ってみたい。なお、以下の区分は筆者(大井)によるものである。

### 第1期 1972～1981年度

「心理生理」の名称は、1972年に特殊環境居住性分科会が生理心理分科会へと名称変更されたのが最初のものである。この特殊環境居住性分科会の最初のテーマは高所恐怖であったらしい。同年の大会発表には関連すると思われる6件の発表が見られる。テーマは開放感、視環境と生活行為、座席選択、都市空間認知、都市環境評価、材質感であった。ただし、1981年までは分類として独立していたわけではなく、当初は光分野の一部であった。結局、1982年から環境心理生理として独立し、今日にいたっている。

第1期においては、さまざまな分野の研究が混在している感があり、人間工学、気象と人間の関係や生態学など、人間や自然に関連しそうなソフトなものはなんでも取り込まれているようにも見える。

### 第2期 1982～1989年度

海外で環境心理系学会が確立され交流も行われるようになってくると、環境心理分野の委員会を建築学会のどこかにつくろうという機運が高まってきたと思われる。1982年度から、名称は「生理心理分科会」のままで不変であるが、分科会の再編が行われ、分科会で取り上げられるテーマが変化する。すなわち環境心理の定義、住環境と精神健康、パーソナルスペース、景観、街のイメージ、座席選択、そして多変量解析などである。EDRA、IAPSといった海外の環境心理系学会の報告も盛んに行われている。生理心理シンポジウム、環境心理学シンポジウムの開催が始まったのも1984年からである。

### 第3期 1990～1996年度

この年より名称が「環境心理生理運営委員会」となる。生理と心理の順番が入れ替わったのが目に付くが、それよりも傘下の小委員会が環境心理と環境生理の2本柱となったことが大きな変化である。人間の心理と生理を柱に環境工学で扱われる分野を複合環境も含めて横断的に扱おうとする意図が感じられる。さらに1992年度からは環境行動小委員会が組織され、3本柱となる。環境心理の教科書作成に向けての議論が活発化する。

### 第4期 1997～2002年度

環境工学委員会の組織改革により、各研究分野の中ではその時々に応じたトピックについて目的をかかげ短期完結型で成果を自己評価することが求められるようになった関係で、新たに4つのWGが発足し、2年ごとに異

なるテーマが検討された。このシステムは委員会活動の活性化を狙ったものと考えられるが、他部門との独立性が高まり横断的な協働は難しくなったと感じられた。

そんな中、建築計画部門の環境行動小委員会と合同で「環境心理生理・環境行動研究小委員会 合同研究発表会」が1997～2001年度まで5回にわたって行われたことは特筆に値する。研究テーマ的に類似のものが、部門が異なることによって大会でも議論の機会がないことを補う貴重な機会であったが、残念ながら中断している。2002年からは入れ替わるように分野の知見や手法を若手研究者に広く伝えることを意図し「環境心理生理チュートリアル」(後述)が始まることになる。

第3期から検討されてきた教科書として、まず「人間環境学」(1998年・朝倉書店)が刊行された。さらに「環境心理調査手法入門」(2000年・技報堂出版)「建築空間のヒューマナイズ」(2001年・彰国社)、「建築・都市空間の科学」(2002年・技報堂出版)が刊行されている。

### 第5期 2003年度～

第4期に刊行された成果物を見れば、環境心理生理分野が一応確立され、基礎的な知見や手法の整理が行われ、実務適用という観点でもテイクオフが果たされたと言える。2003～2004年度にかけて、次なる研究課題の模索、新たなステップに向けての検討が行われ、2005年度より環境心理、感覚・知覚心理、ヒューマナイズという3つの小委員会を中心とする新体制となり、現在にいたっている。



図1 環境心理生理分野 刊行物

## 3. 大会発表に見る環境心理生理分野の研究の現状

現在の研究状況の把握のために、今年度の大会発表をながめてみたい。論文集においては、環境系という区分はあるが、審査は細分化されておらず細分類は大きな意味を持たない。しかし大会のセッションでは投稿された細分類を基にプログラム編成が開始され、設定されている細々分類と実際に投稿された結果を組み合わせることができる。今年度は細々分類の大幅見直しが行われた最初の年である。表1に環境心理生理分野の現在の

細々分類および 2007 年度大会のセッション名一覧を示す。

表 1 はもちろんおおまかな概要を示したものであり、必ずしも各細々分類に応募されたものがそのままセッションを形成しているわけではないが、全体としては分類見直しの意図は成功していると判断できる。昨年から今年にかけては応募数も増加しているのであるが、これは建築計画分野などから心理生理に関連する建築学にとっては比較的新しいキーワードに関するもの（すなわちどこにもうまく適合する分野がなかったもの）や計画原論的な調査・研究が流入してきたように見受けられる。こうして見ると、細分類の独立から 25 年を経て、研究分野としてようやく確立されてきたと言えるのかもしれない。

表 1 細々分類および 2007 年度大会セッション一覧

細々分類名	セッション名
感覚・知覚心理（音・熱・光・空気に関わる心理生理）	音環境の評価 ※1 におい・作業効率
複合環境評価	複合環境評価
生理指標評価（脳波・心拍等）	生理指標評価
空間知覚（開放感・圧迫感・容量知覚等）	室内空間の印象
空間の印象・雰囲気	施設空間の印象・雰囲気
景観・街並み・サウンドスケープ	景観・街並み・サウンドスケープ(1)(2)
空間認知・経路探索	経路探索・サイン
パーソナルスペース・プライバシー	※2
利用者ニーズ・価値観・ライフスタイル	環境心理研究における質的アプローチ(1)(2) オーガナイズドセッション
POE・満足度調査	
理論・手法（調査・分析・提示手法）	
住意識・コミュニティ・合意形成	住意識
子供・高齢者・障害者	高齢者・障害者 子供の遊び空間
その他	

※1 温熱環境に関するものは、高齢者および複合環境のセッションに、光に関するものは屋外照明を景観のセッションに、室内照明・色彩に関するものを室内空間の印象セッションに含めた。

※2 今年はパーソナルスペース・プライバシーに関する発表投稿はなかったが、これまでの実績からすると、これはたまたまであろう。オーガナイズドセッションの影響もあるかもしれない。

#### 4. 委員会組織から見る環境心理生理分野の現状

##### 4.1 環境心理生理運営委員会の現体制

環境心理生理運営委員会は2005年に改組され、現在の体制に移行した<sup>3)</sup>。すなわち運営委員会の統括の基に、環境心理小委員会、感覚・知覚心理小委員会、ヒューマ

ナイジング小委員会の3小委員会と、必要に応じて設置されるWGによる体制である。環境心理生理研究は、環境形成の方向性を検討するために環境利用者の要求や価値観を明らかにする、心理量を中心に扱うタイプの研究と、たとえば「〇〇感」といった特定の心理量に着目し、この心理量を規定する物理量を見出し両者の関係を定式化するタイプの研究とに大きく二分される。環境心理小委員会と感覚・知覚心理小委員会のふたつは、それぞれこれらの研究タイプをカバーする。一方、ヒューマナイジング小委員会は、数値や仕様を規定するかわりに開発プロセスのあり方を規定する、新しい形のアカデミック・スタンダードをめざすものとして設置されている。以下に、3つの小委員会それぞれの歴史的経緯、現況、将来の目標を紹介する。

##### 4.2 環境心理小委員会

###### a. 歴史的経緯

2005年度の環境工学委員会改組とともに、人間・環境系を総合的に扱う環境心理研究を整理・発展させる組織的取り組みを行うことを目的として設置された。

環境心理研究は、様々な関連分野との学際的な研究領域であり、いわば「横糸」的分野といえる。そのため、既成の特定分野の枠内には収まらない研究課題に取り組むことと、そうした課題にアプローチするための理論や方法を追求することが宿命である。そこで、環境心理に関連する分野の研究を行っている研究者および研究分野をリストアップし、データベース（名簿）を作成することと、環境心理研究が今後（現在および将来）取り組むべき研究テーマをリストアップすること（ブレイクストレーミング、およびディスカッション）から本小委員会の活動がスタートした。

###### b. 現況解説

今年度に入り、小委員会の開催時に若手研究者の研究を紹介・討論する場を設けている。今後はこの活動は半公開のミニ研究会として継続していく予定である。また、学際的な展開の活性化をはかるため、「環境心理学の学際的展開WG」を設置した。本WGを中心として、関連分野の研究者を含めた交流研究会等の活動を計画していく予定である。

2007年度の大会では、「環境心理研究における質的アプローチ」をテーマとしたオーガナイズドセッションを企画し、大会前後に企画する恒例のチュートリアルもこれにあわせて「質的アプローチの実際」というテーマにて開催することになり、その具体的な内容・実施について小委員会で検討した。「質的アプローチ」の手法は、近年の環境心理研究で独自の発展をみせている。そこで、OS およびチュートリアルのテーマとして取り上げることで、成果発信と普及促進の相乗効果を狙おうという試みである。

### c. 将来の目標と課題

冒頭で述べたように、環境心理研究は関連する諸分野における学際的な展開という遠心力とともに、魅力的な理論や手法を提供・発信し続けるという求心力を持たねばならない。そのために、若手研究者の発掘・育成（ミニ研究会）、関連分野との交流（環境心理学の学際的展開WG）、成果発信（OS、シンポジウム等）、普及促進（チュートリアル）等の仕掛けを有機的に連携させていくという取り組みを、本小委員会が中心となって担っていきたいと考えている。

## 4.3 感覚・知覚心理小委員会

### a. 歴史的経緯

本小委員会は、音、光、熱、空気などの各分野で活動をしている感覚・知覚心理研究に関わる研究者からなる横断的な委員会として、設置されたものである。

本小委員会が設置された大きな理由とは、それまで建築学会の環境心理生理分野の活動においては、どちらかというと社会心理学的な環境心理学が中心であり、熱・空気・音・光などの物理的要因の心理生理的評価を主要な研究対象とする活動として積極的に位置付けられてこなかったことが挙げられる。建築に関わる心理・生理的研究分野において、感覚・知覚心理的手法は、古くから利用されてきたにもかかわらず、心理・生理運営委員会が所属する環境工学分野では、音、光、熱、空気等の対象要因別に分類されることが多いため、それぞれの分野を横断した研究交流が十分とは言えなかったのである。本小委員会の設置は、物理環境要因の感覚・知覚心理的な研究活動を活発化し、環境心理生理研究の一つの柱とすることが目的であったともいえる。

例えば温熱環境に関する研究では、建築学学科の講義で習ったであろうPMVやET\*, WBGTなどの温熱環境指標に関わる温熱生理学的な研究は、主として熱環境運営委員会内の委員会で議論・意見交換されるだけで、環境心理生理運営委員会での中心的研究テーマとはなっていない。これは他の環境要素の研究についても言えることであり、視環境分野の見やすさ研究、音環境分野の騒音評価、空気環境分野のにおい評価など、およそ熱、空気、音、光の各分野の心理生理研究として中心的な研究が、環境心理生理運営委員会ではあまり議論されていなかった。本小委員会は、このようなこれまで各個別の分野でしか議論されて来なかった最新の感覚知覚心理的な研究を横断的にレビューし、研究の活性化を行うとともに、例えばそれらを複合環境評価手法に取り込むことによって、環境心理生理研究の幅を広げ、ひいてはよりよい建築・都市の環境設計に寄与することを目的としている。

### b. 現況解説

各環境要素領域での感覚・知覚心理的な研究成果を互いに共有し、環境心理生理研究、さらには空間デザインに生かしていくことを目的として、「建築空間における感覚・知覚心理シンポジウム」と題する連続シンポジウムを企画し、この2年間で計3回の連続シンポジウムを開催している。

連続シンポジウムでは、各分野から比較的若手の研究者や実務に携わっている方々にご参加いただき、各テーマに関連する講演の後、1時間40分程度の十分な時間を取って質疑応答を行うことにより、初学者でも疑問点を解消し、視野を広げられることを狙ったものである。

これまでの各シンポジウムの講演内容は下記の通り。

（第1回）環境評価における評価尺度の問題（2006.1.14）  
・環境評価と評価尺度の諸問題：合掌 顕（岐阜大学）  
・温熱感覚・温熱快適性の測定と評価：兼子朋也（米子高専）  
・においの評価尺度における諸問題：光田 恵（大同工大）  
・複合環境評価における「非特異的評価尺度」の意義再考：松原斎樹（京都府立大学）

（第2回）環境評価におけるモデル化と実験手法（2006.11.25）  
・サイン音の聴覚認知—調査と実験の計画および方法の一例—：秋田 剛（東京電機大学）  
・非定常過程における体温調節系および温冷感のモデル化：高田暁（神戸大学）  
・においの主観評価実験における諸問題について：山中俊夫（大阪大学）

（第3回）環境評価における社会的・文化的視点（2007.3.10）  
・評価者の社会・文化的背景による景観の心理的評価構造の相違：西名大作（広島大学）  
・中国地方における文化的景観保全と住環境の意識：長野和雄（島根大学）  
・暑さ・寒さに関わる居住者の住まい方とその評価：澤島智明（佐賀大学）

2007年度も下記の通りシンポジウム開催を予定している。これまでの環境評価指標は健康な成人を対象とするものが殆どであったが、高齢社会を迎えた今日、環境設計におけるノーマライゼーションは不可欠なものと言えよう。そのためには、まず高齢者の方々がどのように環境を感じ、知覚しているのかを知っておく必要がある。分野を問わず本シンポジウムをそのための第一歩として活用していただきたい。

（第4回）高齢者の感覚・知覚特性について（2007.10.13）

会場：大阪大学豊中キャンパス待兼山会館  
 ・高齢者の音声了解度特性：翁長 博（近畿大学）  
 ・高齢者の視認能力：岩田三千子（摂南大学）  
 ・高齢者の温熱的特性：佐々尚美（武庫川女子大学）

また2007年度からは、これまで環境心理生理運営委員会の配下で独自で活動をしていた「屋外空間における環境評価WG」と連携して活動を行うこととし、両委員会の相互的な協調体制を整え、幅広い視野をもって活動をスタートした。屋外空間の評価・設計は、特異的な評価に基づいて行うことはできず、複合環境評価的なアプローチが不可欠である。

c. 将来の目標と課題

将来的には、設置時の目標の通り、音、光、熱、空気等の各分野の感覚知覚心理研究を統合し、複合環境評価手法、屋外空間や地域環境を含む空間デザイン手法、知的生産性（プロダクティビティ）など、統合的な環境評価手法の確立のための研究基盤を作ること为目标としている。そのためには、これまで以上に多くの研究者の参加が必要であり、東京でのシンポジウム開催や、ITを利用した媒体による情報の共有、大学院生など若い研究者の方々へのアピールなどが課題といえる。

4.4 ヒューマナイズ小委員会

a. 歴史的経緯

「ヒューマナイズ」とは、「建築空間や都市環境を、人間の要求に沿った、人間のための空間にすること」という意味であり、シンシナティ大学のW.F.E.プライザー教授が用い、建築学会の環境心理分野のメンバーが使い始めた言葉である。建築空間は、人間のために作られる

ものであるが、実際の設計過程では、企画段階から詳細設計に至るまで多種多様な選択肢があり、費用や時間などの制約の元で、膨大な意思決定を、多数の関係者との調整を経て行わなければならない。発注者も設計者も、組織が担当することの多い現代では、組織内部で思考や判断の整合性を確保することも容易ではない。そのためには、設計対象の目的や要求を明確にしておくことが重要な作業である。

2002年度にヒューマナイズに関するSWGを設け、2004年度には、ユニバーサルデザインの7原則を参考に、ヒューマナイズの4原則（試案）を作成し、以下のようにその技術や手法を整理した。

- 原則1. 要望や要求を収集する
- 原則2. 要求や問題点を体系的に把握する
- 原則3. 秀例を学習し、あるべき姿を検討する
- 原則4. 運用段階でも改善する

また、建築雑誌1526号（2004.12）に「ヒューマナイズ」、技術報告集No.21(2005.6)に「建築空間のヒューマナイズに関する検討」を発表。2006.4.28に、チュートリアル「ニーズをカタチにする方法」を開催（建築研究開発コンソーシアムと共催）。

b. 現況解説

2005年度から小委員会に改組され、新たな活動として、「おもてなし感」をテーマに設定した。「おもてなし感」とは、利用者が施設側から「もてなされている」と感じる印象で、この概念を提案したのは大学院生の研究メンバーであり、日本の公共空間に、若い方たちがそういうレベルを期待する状況が存在することは注目に値する。居住性や快適性の水準が向上した結果、居心地の良い環境であることが当たり前になったことが背景にあると考

表2 交通ターミナルにおけるおもてなし感の品質表

1次	2次	外観・外装	全体計画・空間構成	室空間・開口部・内装	サイン	設備・家具什器・アート・植栽	サービス、運営、その他
安心できる○	犯罪に会わない		△				○
	不安がない		△		○	△	△
	安全である						△
楽に移動できる◎	多数の人もスムーズに移動できる		○			○	○
	障害者も移動しやすい		○	△		○	
	迷いにくい、自分がどこにいるか分かる		○	△		△	○
	目的地までの経路が分かりやすい		○				
	その他						△
便利である○	休憩できる						
	人と待ち合わせがしやすい						
	その他						
居心地が良い○	清潔である		△	◎			
	騒がしくない			○			
	(視覚的に)ごちゃごちゃしていない			○			
	窮屈な感じがしない		△	○	○		△
	温もりが感じられる			△			○
	その他		△	△		△	
愛着がもてる○	個性的である	○			△	△	
	ワクワク感がある・楽しい		○	○		△	○
	その他					△	

えられるが、高齢社会や観光立国を目指すわが国の今後の公共空間のあり方に関わる問題提起になるのではないだろうか。ヒューマナイズング小委員会では、「おもてなし感」は、①不快さや不満を感じずに「人間扱いされている」と感じられる基礎的なレベル、②多様化している利用者の要求にこたえられる「懐の広さ」、③特定の個人の特定の状況に応じたサービスを提供できる高度な対応など、多角的な視点を含んでいることが議論されている。

#### c. 将来の目標と課題

小委員会では、駅などの交通ターミナル空間を対象に、空間がどのような特性を備えていなければならないかを明らかにすることを目標とし、これまでに「交通ターミナルにおけるおもてなし感の品質表」(表2)を作成し、実際に駅を設計した担当者と意見交換を実施してきた。現在 2007 年度のアーバンインフラテクノロジー推進会議研究発表会(10月)に応募するため、論文を準備中であり、これらの知見を実務応用可能なものとして整備していくことが課題である。

#### 4.5 その他のWG活動

##### a. 屋外空間における環境評価WG

従来からの光、音、熱、空気などの個別的な物理要素についての心理生理応答に関する研究は、建築物室内の物理的環境制御をその主たる目的とする。しかしながら、屋外空間においては、それら物理要素が同時かつ極端に人間に影響を及ぼし、また、動的に変化するため、室内とは異なる環境評価と、それに基づく設計・計画が行われる必要がある。本WGでは実際の屋外空間を対象とした調査・測定の結果について多様な観点から検討を行い、その成果を広く公表することを目的とする。

本WGの前身である屋外空間の心理生理評価WGでは、2006年度に、実際の屋外空間を対象とした調査・測定を実施した。しかしながら、得られたデータについて音・熱・光・空気の各専門分野の観点から十分な分析・検討を行い、追加の調査・測定を実施するには、2007年3月末までの設置期間内では困難であったため、本WGにおいて、データの詳細な検討とシンポジウム等の開催による成果の公開や社会的還元を図る。

##### b. 環境心理学の学際的展開WG

新しい視点からの環境心理学関連のイベントを企画し活動の活性化を図る。建築学会内で比較的近い分野である建築計画系の心理研究者や関連学会(生理人類学会、日本インテリア学会など)の研究者等と共同して研究会等を行い、学際的な展開を行うことを目的とする。

建築学会の組織構成上、類似研究領域が他の本委員会にまたがっているため、学際的な展開のための企画・実行組織が必要である。

##### c. 環境心理生理情報アーカイブWG

環境心理運営委員会傘下の小委員会およびWGの委員会活動、シンポジウムや研究会などの資料を整理し、可能なものはWeb上に公開することを目的とする。

現在、環境心理生理運営委員会傘下では3つの小委員会のほか、傘下のWGで多彩な活動が行われているが、2年を経過して小委員会間での情報共有はじゅうぶんではなく、各小委員会、WGによるWebへの情報公開も進んでいない。少数の担当者によるWGにより、情報を整理して共有・公開の促進を図る。

#### 5. 次世代研究者の育成活動 チュートリアル

環境心理生理分野では、環境要素を横断的に扱うことをひとつの目標として研究活動が行われているが、現状では環境心理生理分野の専門家を擁し、このようなアプローチによる講義科目を実施している大学は少数である。そこで、このような分野に興味を持つ学部生・大学院生や関心のある実務者を対象として「チュートリアル」という研究会・講習会を企画し、すでに6年目を迎えている。以下にその概要を示す。写真(図2)でもわかるように、参加者の希望に応じたグループ分けを行い、講師との距離を縮めて、個人の研究テーマと関連させてダイレクトに質問したりノウハウを得られる機会を設けることを目指している。

##### 第1回 環境心理生理チュートリアル(2002.8.1~2)

日本建築学会大会(北陸)の前日に、環境心理・生理分野の研究手法、概念や用語、研究手法の習得と、研究を取り巻く建築の状況の把握を目的として、チュートリアルを開催した。卒業論文に取り組む学生、大学院生、環境心理・生理分野の研究者、関心のある実務者を対象として実習や演習を取り入れた合宿形式で行い、研究に関する悩み事の相談も受け付けた。

会場：金沢工業大学および金沢市内の民宿

8/1 夜 自由討論(大会での発表を話題に)

8/2 チュートリアル

1.環境の知覚・評価の多様性

2.評価グリッド法(心理の内部構造を探る手法)ワークショップ 講師：楨究(実践女子大学)、讃井純一郎(関東学院大学)ほか

3.懇談会(宿舎にて)

4.サウンド・エデュケーション—音からとらえる環境の発見 土田義郎(金沢工業大学)

##### 第2回 環境心理生理チュートリアル(2003.9.7~8)

大会(東海)終了後、環境心理・生理分野の調査・分析手法の習得を目的とするチュートリアルを開催した。これから卒論や修論で環境心理・生理研究に取り組んでみようという学生、心理・生理調査を業務に活用しようと考えている実務者を主対象に、単なる講義ではなく、問



題を共有しながらの実習や演習を取り入れた。また合宿を通じて、参加者同士の情報交換、あらたなネットワーク形成も行われた。

会場：多治見神言修道院 研修センター

9/7 夜 夕食+懇親会(修道院特産ワインを飲みながら)

9/8 個別ワークショップ(下記3テーマの中から選択)

- 1.インタビュー調査：評価グリッド法の基礎と実際
- 2.非言語的定性調査：認知マップを用いた調査と分析
- 3.統計分析の最新動向：因果関係の統計的モデル化
- 4.全体ワークショップ：「環境心理の実務適用：現状と課題」

基調講演：宇治川正人(竹中工務店)、讃井純一郎(関東学院大) 他

### 第3回 環境心理生理チュートリアル (2004.8.31~9.1)

今回は特に、環境心理・生理研究にこれから本格的に取り組もうとしている方々を対象に、研究テーマの発掘方法、実験調査への落としこみ方、研究を進める上でぶつかる問題とその解決法といった実践的なトピックについて、少人数のグループディスカッションを交えて講習を行った。卒論や修論を控えた学生諸君はもちろんのこと、業務として環境心理生理研究に取り組もうという方、また日ごろの素朴な疑問を解消したいと考える方々までを幅広く対象とした。二日目午後には、環境心理生理研究の知見を生かして設計されたグループホームの見学も行われた。

会場：NTT北海道セミナーセンタ

8/31 夜 夕食 + 懇親会 (大会での発表を話題に)

9/1 チュートリアル

1.全体ワークショップ「環境心理生理研究の先達に学ぶ失敗」講師：大野隆造(東京工業大学)、讃井純一郎(関東学院大学) 他

2.個別ワークショップ「研究のはじめ方・すすめ方」  
「テーマの発掘術」、「調査/実験方法」、「データ分析手法」など研究の進行程度に応じたトピック別に、数人のグループに分かれてのディスカッション、Q&A。

グループリーダー：テーマの発掘術—大野隆造(前掲)、調査/実験方法—片山めぐみ(東京工業大学)、データ分析手法—小島隆矢(建築研究所)、その他よろずQ&A—讃井純一郎(前掲)

3.見学会「実例に見る環境心理生理研究のアプリケーション」痴呆性高齢者グループホーム「ほほえみ」・「こもれび」(設計：隼田尚彦(北海道情報大学))

### 第4回 環境心理生理チュートリアル (2005.9.3~4)

環境心理に関する研究手法を講習するチュートリアルを、大会終了後に開催した。今回は、大阪市内でも歴史と文化の残る夕陽丘地区の一心寺を会場に、前年同様幅広い対象者とともに人間の心理・生理を捉える手法をワークショップ形式の実習を通して学び、まちづくりや建

築において目指すべき心の豊かさとは何かについて考えることとした。

会場：トークインなにわ、一心寺南会所

9/3 夜 懇親会(大会での発表を話題に)

9/4 チュートリアル

1.講義「人間-環境系概論：環境の捉え方」 大井尚行(九州大学)

2.ワークショップ「心を測る/環境心理調査手法入門」トピック別に少人数のグループに分かれ、実習形式のワークショップを行った。講師：小島隆矢(建築研究所)、讃井純一郎(関東学院大学)、中村芳樹(東京工業大学)ほか

3.見学会「一心寺境内、周辺」

一心寺山門、日想殿、写経堂、三千仏堂ほか

4.講演「心の豊かさとは：夕陽丘地区のまちづくりを通して」 講師：高口恭行(一心寺長老、建築家)



図2 第4回 環境心理生理チュートリアル風景

### 第5回 環境心理生理チュートリアル (2006.10.13)

大会時に企画が間に合わなかったため、関連のシンポジウムに合わせ、地方開催の試行として主に大学院生を対象として福岡で開催した。

会場：九州大学 大橋キャンパス

1. 環境心理調査法の施設設計への応用 小島隆矢(建築研究所)

2. 顧客ニーズ調査手法の実際(評価グリッド法他) 讃井純一郎(関東学院大学)

3. 環境心理よろず相談 上記2名に加え、秋田剛(東京電機大学)、川井敬二(熊本大学)、宗方淳(東京大学)、大井尚行(九州大学)

### 第6回 環境心理生理チュートリアル (2007.8.31)

大会のオーガナイズドセッションのテーマでもある「質的アプローチ」の手法を学ぶ。インタビュー等の質的アプローチは、いわば手技ともいえる実践的なノウハウが結果の成否に関わる一方、通常、そのノウハウまで

は論文等には書かれないので、どうやって学んだらよいか分からないという声をよく聞く。そこで、本ワークショップでは、経験豊富な講師陣に“論文には書かれない実践的なノウハウ”についてお話しいただく予定。

会場：九州大学 大橋キャンパス

1. インタビュー調査の実際 高橋正樹（文化女子大）
  2. キャプション評価法の実際 古賀誉章（一級建築士事務所てらちか）
  3. 自由記述データ分析の実際 小野久美子（国土技術政策総合研究所）小島隆矢（早稲田大）
  4. 個別ワークショップ「環境心理調査よろず相談」
- 終了後 講師陣との懇親会

## 6. 将来展望

2005年度より環境心理生理運営委員会では、環境心理系の委員会の原点に立ち返り、小委員会の役割を研究タイプ別に整理し、個人の研究分野を広げていけるような議論の場を構築することを目指してきた。そのためにこれまで環境心理分野で研究活動を行ってきた方に限らず、どのような研究者がいらっしゃるかを把握し、ネットワークを広げ、また大会等ではじゅうぶんとは言えない議論の場を提供しようと検討を重ねている。

2007年度の主査改選に際しても、同様のコンセプトが引き継がれ、これらが主査個人の方向性ではなく研究分野からの方向性の発信であることを示そうと考えた。

近々の展望としては、予定より遅れているが研究分野の成果発信として刊行小委員会で準備中の「環境心理学術用語集（仮）」や「環境心理尺度ハンドブック（仮）」などを刊行することが当面の目標となる。

各小委員会を中心とする活動、定着しつつある感覚・知覚心理シンポジウムおよび環境心理生理チュートリアルは当面、継続・発展できるものと思う。新しく環境心理生理分野に興味を持っていただいた方が、過去の経緯や研究蓄積などを参照しながら新たな研究を展開していただけるように、環境心理生理情報アーカイブWGを中心に資料を整理し、公表していきたい。1990年代前半に開催されたシンポジウムには、昨今のさまざまな社会的な問題に対して有益ではないかと考えられるものも多い。たとえば「映像の中の空間認知」「環境心理研究における時間ファクター」など、その後の研究の進展も加えて再度開催できそうなテーマがありそうである。

新しく立ち上げた環境心理学の学際的展開WGでの、新しい視点からの環境心理学関連のイベントも期待される一方、かつて開催されていた建築計画系との合同研究発表会復活に向けての検討も開始している。

## 参考文献

1) 乾正雄：学会賞受賞論文「視環境の心理的評価法の建築設計への応用に関する研究」建築雑誌 Vol.89, No.1083, pp.685-686, 1974.8

2) 内田茂：研究活動 環境工学・生理心理関係，建築年報 1985年，p.28, 1985

3) 讚井純一郎：環境心理生理運営委員会の新体制とその狙い，環境工学シンポジウム資料，2005.1